

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第62回

当社の支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第62回目は、創業から65年、東京の伝統工芸江戸切子の技術を守り続けている硝子メーカーの(株)堀口硝子(江東区)をご紹介します。同社には、中小企業の新規事業を支援する公社の助成事業「東京都地域中小企業応援ファンド」(注1)及び「産学連携デザイン開発プロジェクト」(注2)をご利用いただいています。

伝統に新しい息吹を吹き込む「切子ルネサンス」

株式会社堀口硝子

技術を守り伝えて65年

昭和22年に先代の堀口市雄氏によって創業された(株)堀口硝子は、今年で創業65年目を迎えた。当初はシャンデリアおよび食器のカット加工を専門としていたが、その後、販売も開始した。現在は江戸切子を中心に、取扱商品はおよそ3,000種類にも及ぶ。最近ではインターネット上にオンラインショップを開設するなど、個人向けの販売展開にも力を入れている。加えて、同社は江戸切子のギャラリー運営も手掛けており、生産・販売にとどまらず、江戸切子の魅力を伝えるための情報発信にも取り組んでいる。

江戸切子を取り巻く環境の変化

江戸切子は江戸時代後期に始まり、町民文化の中で育まれてきた。明治6年に殖産興業政策の一環として品川興業社硝子製造所が開設され、日本における近代的硝子生産が始まった。その後海外からの技術導入など近代工業の要素を取り入れながら、今日まで長く存続する基礎を作った。

大正期から昭和初期にかけてカットガラスは人気となるが、戦中に硝子業界は衰退を余儀なくされた。戦後は、洋食器の普及により硝子業界も復興してきたが、カットガラス加工の機械化や格安な輸入品の増加により大きな影響を受け始める。昭和50年代以降は、行政の伝統工芸振興政策を受け、伝統工芸の看板を掲げた活動も進みはじめ



江戸切子

る。現在は、メーカー・問屋の廃業による原材料の入手難、職人の高齢化、後継者不足等の様々な課題を抱えている。

閉塞した状況の突破口として

「伝統工芸にとって現在の状況は厳しいものです。商品の高価格化が江戸切子を食卓から飾り棚に追いやり、市場そのものが縮小しています。歴史的に見ると、江戸切子は時代ごとに最先端の技術を取り入れ発展してきました。個人的な意見を言いますと、ここ10~20年は江戸切子ブランドに頼り過ぎている面があり、閉塞した状況を打開できていません」と、新商品開発を担当した神長明生氏は語る。

「ガラスは自然界には天然では存在しないものであり、人の意志によって創られたもの。まだまだ未知の可能性を秘めた物質です」と語り、「伝統は革新の連続である」を同社の行動指針のひとつとしている堀口三備社社長が、この状況に風穴を開けるべく招へいたのが神長氏だった。自動車関連企業で経営企画、商品開発部門に長く従事してきた神長氏が初めて目の当たりにする伝統工芸の世界は、変化に乏しく、新商品開発をしても従来の枠からはみ出ることとは少ない。他社との差別化を図りづらい状況であった。

神長氏がまず取り組んだのが、公社の産学連携デザインプロジェクトだった。江戸切子と異素材がコラボレーションすることで江戸切子単独ではなし得ない仕事ができると考え、同じ東京の伝統工芸である東京組紐、



江戸切子を用いた金メダル

東京彫金と連携して新商品開発に挑戦した。当時はオリンピック招致が話題となっていたため、江戸切子を使用した「金メダル」を開発した。若いセンスを盛り込んだ魅力的なデザインとコストダウンを両立させるため、当時首都大学東京でインダストリアルアートを教えていた鈴木敏彦教授と学生に参画してもらった。完成したメダルは国内外の展示会で伝統工芸職人の心意気を示し、賞賛を浴びた。(注3)

“東京都地域中小企業応援ファンド”の積極的活用

視点を変えて取り組むことで多くの人の心に残る作品ができることを実感し、さらなる新商品開発の意欲が湧いた神長氏は、次に東京都地域中小企業応援ファンドに取り組んだ。伝統技法を用いた切子硝子の器と高輝度LEDの光を組み合わせた「KIRIKO LIGHT」の開発である。



KIRIKO LIGHT

「ガラスは光を取り込んで、その光をまた七色にして解き放つ」と堀口社長も話すように、カットガラスは光との相性がとても良い。光を当てると、複雑な文様に光が反射し華やかに煌めきだ

す。これまではカットガラスの外から光を当て鑑賞していたが、中から光を当ててはどうかと考え開発に臨んだ。江戸切子は文様を硝子に切り込み作られているため熱に弱く、中に光源を入れるとその熱で割れてしまうことがある。光源をLEDにする、生産工程を工夫する等により、現代のライフスタイルに合った機能、価格を併せ持つ新しい伝統工芸品を生み出すことに成功した。「KIRIKO LIGHT」はワイングラスや小鉢など日常使いの食器を使ってデザインしたことで、現代の食卓に違和感なく馴染む。その光はプログラム制御され、切子硝子を通してテーブル上に拡散する光模様はゆっくりと呼吸するような間隔で明滅を繰り返し、癒しの空間を演出する。

「KIRIKO LIGHT」は展示会で大きな反響を呼び、新規取引先を開拓することができた。しかし反響の大きさに比べ、販売量は決して芳しいものではなかった。良いものが売れるとは限らない。新商品開発の難しさも味わうことになった。

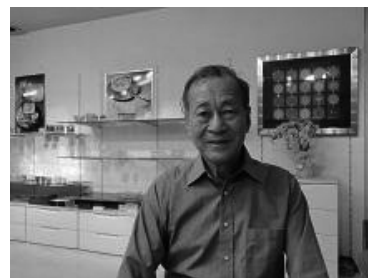
伝統に新しい風を送り込みたい

「昔から職人は時代にあった最新技術や思想を取り入れて、江戸切子を発展させてきました。今後は時代の要請に合わせて新しいことに挑戦しつつ、江戸切子の精神が詰

まったものを作っていきたい。いわば『切子ルネサンス』を起こしたい」、そう語る神長氏は、江戸切子の将来を見つめている。

神長氏は海外展開を視野に入れている。特に中国展開がスムーズに進むよう、現地の協力企業の名前を冠した販売会社CommaJapan(株)を設立した。会社の海外展示会出展支援を受け、上海国際ギフト展に出展したところ、「KIRIKO LIGHT」は大きな反響を得、大きな商談がまともうとしている。

「会社の様々な支援プログラムを通じて感じたのは、公的支援を活用することで自分たちのビジネスの限界を超えられるということです。従来の仕事のやり方は現状打破に様々な困難が伴います。しかし、外部からの支援を活用すると新しい市場展開が見えてきて、それを形にすることも可能になると感じています」



新商品開発を担当した神長氏

市場動向は決して楽観的なものではないが、苦しい時こそ委縮せず「下手な鉄砲でも打ち続ける」べきだと神長氏は感じている。動けば大小は別にして必ず結果が付いてくる、しかし動かなければ変化が起こることはない。伝統を守りつつ、時代に受け入れられる製品づくりを意欲的に行おうとする同社のさらなる飛躍が期待される。

(助成課 杉山さやか)

(注1) 東京都地域中小企業応援ファンド: 地域資源活用イノベーション創出助成事業: 地域の魅力向上や課題解決に取り組む、意欲とアイデアに溢れた中小企業者等のビジネスプランに対して助成金を交付する。地域密着型のイノベーションを数多く生み出すことをねらいとしている。

(注2) 産学連携デザイン開発プロジェクト: 新製品開発をしたい中小企業とデザイン系大学の学生デザイナーを結びつけ、共同での商品アイデアの創造を促進するプロジェクト。

(注3) このメダルは「東京都経営革新優秀賞」の副賞として採用され、10月27日の表彰式で受賞企業8社に贈呈された。

企業名: 株式会社堀口硝子
 代表者: 堀口 三備
 資本金: 1,500万円 従業員数: 19名
 本社所在地: 東京都江東区大島2-39-4
 TEL: 03-3636-6363
 FAX: 03-3684-3339
 URL: <http://www.horiguchi.biz/>